

「夜叉ヶ池」考

A Research for Kyoka's

"Yasyagaika"

小林 輝 治

一

鏡花の大正期の戯曲活動が、ハウプトマンの「沈鐘」翻訳を、一つの契機としたことは広く知られるところである。

「沈鐘」の翻訳が発表されたのは明治四十年五月から六月であり、翌四十一年九月、五齣完訳の上、改めて春陽堂から単行出版されている。しかも、共訳とはいえあとにも先にもたった一度の翻訳を試み、それも、何のためらいもなく「面白い、是非やってみて見たい」と快諾し」（登張竹風／明四〇・七「沈鐘の翻訳について」）たといわれている。さらにその翻訳が、長谷川天溪によって問題にされた時にも、鏡花は「敢て原作の神髓を写し得たり、とは言はぬ」が、「原作は嘸おもしろからう。読んで見たい、と言ふ念は起るであらう、とだけは確に思ふ」（明四〇・七「あひく傘」）となかなかの自信の程を窺わせた。これらは「沈鐘」の翻訳が、鏡花にとって並のも

のではなく、心に深く一つの跡を残したに違いないことを物語っている。

やがて大正二年、矢継ぎ早に「夜叉ヶ池」（三月）・「公孫樹」（四月）・「紅玉」（七月）・「海神別荘」（十二月）・「恋女房」（十二月）と発表を続けるわけだが、未完のものを入れても明治期に発表された戯曲の数の、わずかに六編でしかなかったことを思えば、これはまさに驚異的である。しかも、その疾風怒濤ともいうべき大正二年の、最初の「夜叉ヶ池」が、沈鐘譚だったとあれば、改めて、鏡花における「沈鐘」翻訳の意味を考えない方が、おかしいというものである。

しかし、この事が「夜叉ヶ池」は「沈鐘」の翻案に過ぎないとか、それに近い解釈を生むとすれば、これはもう大変な誤りである。

大体、笠原伸夫氏もいうように「森に棲む魔界の女と地上の人間の恋、という『沈鐘』の主題」にしてからが、『白鬼女物語』以来の鏡花文学の原イメージといってよく、そのヴァリエーションはか

れの作品のなかにたえず隠顕する」（昭五一・五『泉鏡花／美とエロスの構造』）はずのものである。しかも「夜叉ヶ池」は、「沈鐘」のように魔界の女（ラウテンライン）と地上の人間（ハインリヒ）との恋をテーマにしたというよりは、むしろ純愛（晃・百合）と代議士穴隈鉦蔵に最もよく象徴されるスノビズムとの対立を直接のテーマにしたものである。したがって魔界の女白雪の意味も、最後に大洪水をひきおこし、穴隈鉦蔵らの悉くを裁いて、新たにできた淵の魚や田螺・鱈（たじ）にしてしまい、加えて晃・百合の二人をその淵の主とする所に、よく隠されているように思う。つまり大審判者としての存在である。あるいは反俗思想のすぐれた支持者といってもいい。でなければ、わざわざこの戯曲の時を「現代」と指示し、晃の親友山沢学円のみを、悲劇の一部始終の目撃者として生きて帰らず意味もないように思われる。さらに「夜叉ヶ池」の沈鐘譚にしても、それはハウプトマンから撰取したものではなく、よく調べれば白山説話圏に広く存在する口碑伝説から直接得たものなのである。その事も従来は全く不問とされ、私にはどうにも不思議である。

したがって私は、「沈鐘」翻訳によってほんとうに何か得たものがあるとすれば、それは構想とかテーマではなく、何よりもまず自己の再発見にあったのではないか、という気がしているのである。だからこそ、「沈鐘」翻訳を契機に、その戯曲第一作「深沙大王」（明三七・一〇）に帰り、小説におけると同様、作劇においても「夜叉ヶ池」を物し、ここに幻想の系譜を確立したと考えられるのである。しかもその自信は、「沈鐘」とは全く別の沈鐘譚として「夜叉ヶ池」を著わしたことに十分窺え、鏡花劇の最高作「天守物語」（大六・九）への道も、ここにおのずと開かれたのだと、私は見

るのである。

以下、この問題をより確かなものにしてみたいと思う。

二

そこですまず注意したいのが、斎藤野の人の、「沈鐘」翻訳に触れて発言していることである。

近い中に鏡花は竹風と共に『沈める鐘』を翻案する相である、あはれ幽玄界の冥想に筆も想も熟して居ない日本人が、どれ程までにラウテンラインを解し得べきか、蓋し見物であらう。（中略）予は常に思ふ、西洋のロマンチクを見て今更ら騒いで不思議がつて輸入する必要はない。必要所か無益である、文学は常に国民の信念に基づかなければならぬ、これだから在来の日本の信仰の上に日本のロマンチクを進化発展せしめなければならぬ、これは明かに可能である。この点で故小泉八雲氏は明かに成功した、但し当今之を能くする日本の文学者では恐らくは鏡花の外になからう、鏡花は須らく冥想工夫して或は西洋の名著に接して、更に一段の勉強を要する、思へば此の国民の信念に点火して滅びんとする幽玄の感情を復活せしめて新たなロマンチクの幻の世を創るには、鏡花の前途はまだ中々に遼遠である。／明四〇・九、一〇『泉鏡花とロマンチク』（傍線筆者）

しかも、竹風から「沈鐘」翻訳の話があったのが、鏡花最初の戯曲「深沙大王」を新派合同の脚本として書き、それに用いられた頃と、全く時を同じくしていることである。それは、竹風が先

「夜叉ケ池」考

の「沈鐘の翻訳について」の中で、「既に数年前のこと、たまたま鏡花兄にこの事を談」じと述べた一行によって明らかである。

だとすれば、既に数年にわたる「沈鐘」との長い対話があつて、その末に野の人のことばを聞いていたのである。だからこの頃、自分の作劇の原点を最初の戯曲「深沙大王」の上に、改めて見出していたのではないか、そう思つたりするのである。というのも、「深沙大王」・「夜叉ケ池」共に、野の人のいう「日本のロマンチック」に根ざしているという点からばかりではなく、両者に、余りにも似た点の大きいことである。

一に、いずれも白山に続く福井南越の深い山峽に、その伝説場所を選んでいることである。いかにも僻遠の感のある「越」の一角を選び、しかも越前にあつても南越地方は殊に山懐深く、現在日本最長の北陸トンネルが走る所以でもある。因みに鏡花においてこの地は、越中越後よりも遙かに親しく故郷金沢と東京を除いては恐らく最も懐かしい所で、上京帰京の際には、必ずその足で踏みしめ歩いた土地である。このあたりを描いたものだけでも、「白鬼女物語」(明二七・七八頃)を始めとして「山中哲学」(明三〇・一一)・「水鶏の里」(明三四・三)・「雪靈記事」・「雪靈統記」(大二〇・四)・「栃の実」(大二三・八)等十指に余る。したがって詳細は後で触れるが、この辺の口碑伝説についても、すべからず熟知していたのではないかと思われる。なお「夜叉ケ池」は勿論実在の池で、幾多の伝説をかかえ、「深沙大王」の舞台となる虎杖(現板取)よりもさらに奥にあり、「夜叉ケ池」に、すぐ背後に見えると書かれた三国ヶ嶽(三国ヶ岳／一一八〇メートル)も、今もその名の通り、福井・岐阜・滋賀の三県にまたがる国境の山である。

二に、大洪水が起き等しく俗衆の裁かれるカラストロフィーである。

もっとも「深沙大王」では県議員倉持伝助ひとりの見た幻覚体験、いわば透明な洪水に過ぎず、「夜叉ケ池」では、国會議員穴隈鉞蔵だけではなくそれに組する一村ごとくを呑んで、そこを淵にしてしまうという恐ろしい実在体験、いわばいかにも悲しく不透明な洪水として描かれる。

したがって、その裁きの印象も、後者の強烈さは、とても前者に比すべくもない。しかも、後者にあつては殊更に時は「現代」と定め、たった一人を残してすべてを死滅させるという、旧約「ノアの洪水」をふと思ひ起こさせるその構想には、スノップ的現代への痛烈な批判と、同時に美しき未来への転生願望、いわば現代の死と再生(醜と美の交代)というものを深く謳い上げているようである。そういう点でも、質的には「深沙大王」に勝ること数等の傑作ではないかと思われる。

三に、登場人物とそこに与えられたキャラクターの一致である。ここでも、とかく「沈鐘」との比較において語られ、岩波版『鏡花全集』別巻(昭五一・三)解題においても以下のように記されている。「本作の神宮と村會議員と小学教師が押しかけて、晁と百合をひきはなそうとするのは『沈鐘』で、僧侶と床屋と学校長とが、ラウテンデラインのもとからハイシリヒを連れもどそうとする構想と類似している。」

しかし、ここでいわゆる神官・村會議員・小学校教師は、この他に登場する国會議員穴隈鉞蔵によってすべて象徴される俗衆に分けられる者である。だとすれば、それと全く同じ構図が、「深沙大王」

小林輝治

における県会議員倉持伝助とその取巻きのうちに、既に見出せるではないか。

勿論、その俗衆と対立する晁・百合の二人は、「深沙大王」における松三郎・お俊である。そもそもここで「沈鐘」を出し、百合とラウテンラインとを並べようとすること自体がおかしいのではないか。並べるのならば、白雪姫とラウテンラインを持ってくるべきであろう。これならば、共に妖怪であり、共に激しい恋の経験者である。しかしながら「夜叉ケ池」は、「沈鐘」のように三角関係を通し、美しいけれども、いかにもエゴイステックな愛といったような問題には、何の関心も示さない。大体漱石ならいざ知らず、男女の三角関係のうちに人間の深淵を見ろという、そういう西歐的テーマは、鏡花には無縁のものではないか。したがって「沈鐘」のように、夫とラウテンラインとの間に挟まれ、果ては自殺してしまいうマグダのような存在は「夜叉ケ池」では全く考えられていない。ところで夜叉ケ池の白雪姫・万年姥たちについても、すぐに「沈鐘」を連想しやすいが、これも既に「夜叉大王」の社に棲む紙雛・翁たちとして登場しているのである。しかも最後に洪水を引き起こし、伝助を自滅させる、この妖怪たちの役割も、「沈鐘」にはなく、「深沙大王」と「夜叉ケ池」との間にだけ見られるものである。さらに、「夜叉ケ池」の山沢学円も、見物学問をやって歩く旅の学者という設定は、いかにも柳田国男をモデルにしたきらいが見えるが、晁・百合の二人を庇って、最後まで村人を説得しようとする役割からすれば、やはり「深沙大王」の新聞記者小山田透のバリエーションとして考えられるべきであろう。「沈鐘」には、こうした存在はない。

四

四に、沈鐘の話以外は、テーマ・構想共その大枠は全く等しい。「沈鐘」のテーマはハインリヒとラウテンラインとの恋にある。したがって妻を自殺に追いやったハインリヒは、ラウテンラインとの再会のためだけではなく、自らを裁いて当然、最後には死ななくてはならなかったはずだ。そこにはキリスト教的倫理による、始めから誰が書いても同じような一つの構想というものがある。

ところが、鏡花はそういうパターンからは全く外れた、思いも寄らない構想を掴み出す。それが最後の洪水である。しかも同時にそれは、純愛とスノビズムという対立テーマに、今一つ美なるもの聖なるものの願望というテーマをこれに加えているわけである。勿論テーマの深さ・構想の規模において、「深沙大王」はとても「夜叉ケ池」の比ではないが、そのテーマ・構想の骨格そのものについては、全く等しいというのである。

以上によって、私が、「沈鐘」翻訳によってほんとうに得たものがあるとすれば、それは何よりもまず自己の再発見ではなかったか、だからこそ翻訳を契機に、自分の最初の戯曲「深沙大王」にも一度帰っていったのだし、それを見事にアフューベンして「夜叉ケ池」をつくることもできたのだ、したがってここに「天守物語」への道は開け、作劇においても始めて幻想の系譜を成立させたのではないか、そういったことの意味を、いささかは明らかにしたつもりである。

したがって、「夜叉ケ池」は「沈鐘」の翻案であったり、あるいはそれに近いものなんかでは決してなかったわけである。それどころか、いかに鏡花の個性が顕現しているか、むしろいかに傑作であるか、そういったことを改めて教えられたのではなかったか。だから

「夜叉ケ池」考

私はこうも書いたのである。「その自信は」故意に「『沈鐘』とは全く別の沈鐘譚として『夜叉ケ池』を著わしたことに十分窺え」るだろう。「夜叉ケ池」が鏡花においていかに心に残るものであったかは、あの「天守物語」で何気なくかわされる富姫と侍女たちとの会話によっても知られるはずである。

夫人 夜叉ケ池まで参ったよ。

薄 お、越前国大野郡、人跡絶えました山奥の。

萩 あの、夜叉ケ池まで。

桔梗 お遊びに。

夫人 まあ、遊びと言へば遊びだけれども、大池のぬしのお雪様に、些と……頼みたい事があって。

以下、フォークロアの問題にかわりながら、「夜叉ケ池」が沈鐘譚としても、ハウプトマンの直接の影響は全くなく、まさに自らの「書くべき神話と伝説」もって書かれていたことを、改めて明らかにしてみたい。

三

私は、「夜叉ケ池」を読み、いつも思い出す二つの文章がある。それは、鏡花の「紅玉」を観た山宮允の「井上会の野外劇を観て」（大・二・一二）という批評文と、それを読まれた村松孝氏の『泉鏡花研究』（昭四九・八）での一文である。

●「紅玉」は鏡花氏独特の美しい象徴的な言葉には充ちて居るが余りファンタステイックで、かかる作品に確固たる根ざしを与へ

るために無ければならぬ真実性の不足を感じないわけには行かなかった。私は此の天才に対して大いなる尊敬を払って居る丈この点を残念に思ふ。勿論、氏はロマンティストである。併し氏をして、イエーツの如く書くべき神話と伝説を持たしめたならばと考へない訳には行かない。

●この批評は、「紅玉」の欠点を突いたものとして肯綮にあたるものであり、鏡花にして、日本の風土に適した題材——わが国の昔から伝えられている口碑伝説を駆使して、一篇の劇を構成しえたとき、山宮允の希望は叶えられることとなるわけで、それは大正六年の「天守物語」の出現を待たねばならなかった。（中略）山宮允をして、鏡花に「書くべき神話と伝説を持たしめたならば……」といわしめた、その要求に答えるかの如く、その結果が見事になしとげられたのは「天守物語」（大正六・九『新小説』）であったと、筆者は信ずるものである。

ところが、山宮允のいう「イエーツの如く書くべき神話と伝説を持つ」って鏡花が書いた最初の戯曲は、実は「夜叉ケ池」である。「天守物語」ではない。そういえば最近、渋谷龍彦氏が「化けもの好きの弁」で次のように書いているのを見た。

この『夜叉ケ池』にも、わが国の江戸時代の随筆のなかに発見される、何らかのエピソードが影を落していそうな気がする。戯曲の本筋とは関係がないが、山沢学円が茶代のかわりに百合に語って聞かせる、縁の下で牡丹餅が化けたという越前の妖怪の話は、じつは橋南谿の『東遊記』に出てくる話なのである。愛すべき滑稽な妖怪の話を、うまく利用したものだと思う。（昭五三・九「新劇」）

これは『東遊記』後編に「床下の声」と題して載せられている。

しかし、こうした細部においてのみでなく、もっと一編の核の部分に関わって「イエーツの如く書くべき神話と伝説」が用いられているのである。それは、先にもちょっと触れたが、ハウプトマンから撰取したかに思われている「夜叉ヶ池」の沈鐘譚そのものが、実は白山説話圏に広く存在する口碑伝説から直接得たものだとということである。このことが背景にあればこそ、敢えて「日本のロマンチック・沈鐘譚」として発表できたのではないかと、私には思われる。それほど鏡花は、日本の、とくに北国のフォークロアには通じていたし、だから、この作品にも「確固たる根ざしを与へる」ことに成功したのではないかと思う。

以下、その一つ一つを明らかにしてゆきながら、合わせて、小説のみでなくその戯曲においても、いかに北国のフォークロアが、鏡花の場合問われるかを考えてみたい。

まず順序として、鏡花が北国のフォークロアに通じるに至った大まかなところを述べておこう。

それは、一つには口碑伝説の幼時体験である。自筆年譜によれば「明治十三年四月、町より浅野川を隔てたる、東馬場、養成小学校に学。これよりも先、母に草双紙の絵解を、町内のうつくしき娘たち、口碑、伝説を聞くこと多し」(岩波版『鏡花全集』巻一所収/傍線筆者)とあるが、これは、その作品に徴しても成程と肯かされる。ちょっと気のつくものを挙げても次のようである。

- ① 「黒壁」(明二七・一〇、一一)
- ② 「妖怪年代記」(明二八・三一六)

③ 「照葉狂言」(明二九・一)

④ 「五本松」(明三一・一一)

⑤ 「黒百合」(明三二・六一七)

⑥ 「高野聖」(明三三・一一)

⑦ 「妖僧記」(明三五・一一)

⑧ 「三味線堀」(明四三・一〇)

⑨ 「由縁の女」(大八・一一〇・二)

⑩ 「瓜の涙」(大九・一〇)

⑪ 「ピストルの使い方」(昭二・九一三・二)

⑫ 「飛剣幻なり」(昭三・八)

⑬ 「山海評判記」(昭四・七一)

⑭ 「木の子説法」(昭五・九)

⑮ 「雪柳」(昭二二・一一)

⑤・⑥・⑬・⑮には白山口碑が取りこまれている。とくに⑥・⑮の畜生谷伝説に関しては当然、いずれも未完ではあるが「飛縁魔物語」や「白鬼女物語」も挙げる事ができる。なお、金沢で白山口碑が多く聞ける最大理由は、氏家栄太郎も「武家は勿論町家に於ても白山比咩神社を崇敬して毎年正、五、九の三月及び旅立ち旅帰りには必ず参詣した」(昭七・五「昔の金沢」と述べるように、今も盛んな白山信仰のせいである。

⑬にはまた、能登の代表的伝説の一つ長太むじなの話が重要な展開の役を果たし、⑭には、鏡花の「くさびら」(大一一・六)によって、既に知られる『三州奇談』(堀麦水/江戸中期)の「囲爐裏の茸」(加賀山中)という話が隠されている。

長太むじなについては、能登の節談説教が、毎年金沢へ来てこれ

「夜叉ヶ池」考

を語ったものだといわれているから、鏡花もそうした縁で聞いたかも知れないが、「茸」の話は極めて特殊であり、これはもっと後に、恐らく『三州奇談』を読んで知ったものであろう。

他はすべて、金沢の口碑伝説を用いているが、③における「お銀小金」譚、④の「芋堀藤五郎」譚は、共に金沢では今も、最も知られる伝説の一つである。

二つには、鏡花若き日の旅、とくに上京帰京途次の、「春日野」山行・「栃の木」越えの体験、福井南越の道行があったと思われる。その印象の深さは、「栃の実」(大二三・八)一つによっても十分に窺い知ることができる。

其の年は八月中旬、近江、越前の国境に凄じい山嘯の洪水があつて、いつも敦賀——其処から汽車が通じて居た——へ行く順路の、春日野峠を越えて、大良、大日枝、山岨を断崖の海に沿ふ新道は、崖くづれのために、全く道の塞つた事は、もう金沢を立つ時から分つて居た。

前夜、福井に一泊して、その朝六つ橋、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俾で過ぎて、九時頃武生に着いたのであつた。——誰も言ふ……此処は水の美しい、女のきれいな処である。柳屋の柳の陰に、門走る谿河の流に立つ姿は、まだ朝霧を其のまゝの萩にも女郎花にも較べらるゝ。が、それどころではない。前途のきづかひは、俾も此宿で留まつて、あとの山路は、その、いづれに向つても、もはや通じないと言ふのである。

茶店の縁に腰を掛けて、渋茶を飲みながら評議をした。……春日野の新道一条、勿論不可い。湯の尾峠にかゝる山越え、それも

覚束ない。たゞ道は最も奥で、山は就中深い、栃の木峠から中の河内は越せさうである。

栃の木峠から中の河内、そして木之本へ出る道は、いわゆる北国街道である。こうして琵琶湖に程近い町から上京したこともあったのであろう。

この南越・琵琶湖口碑を生かしては、先の「白鬼女物語」などもそうであるが、他に「妖剣紀聞」(大九・一、四)や「瓔珞品」(明三八・六)を挙げることができよう。「瓔珞品」に採られているのは、「雨月物語」でよく知られた琵琶湖の「夢心(の)鯉魚」譚である。

四

さて、改めて「夜叉ヶ池」には、少くとも五つの龍神譚が用いられていることを述べてみたい。いずれも、幼時「町内のうつくしき娘たち」から聞いたものか、あるいは若き日の旅で得た口碑伝説であると思われる。まず、その話を北国街道に沿い北から表題化して並べれば次のようである。

- ① 白山「千蛇ヶ池」伝説(泰澄大師譚)
- ② 金沢「沈鐘」伝説(尾張町薬種商「福久屋」創業譚)
- ③ 今庄「夜叉ヶ池」伝説(雨乞犠牲譚)
- ④ 敦賀「金ヶ崎」伝説(沈鐘譚)
- ⑤ 琵琶湖「三井の晩鐘」伝説(龍神供養譚)

以下、作品の展開に即し、それぞれの伝説を資料に基づいて説明したい。

大体主人公晃が、夜叉ヶ池山麓に住みつくに至ったのは、ある伝説を信じ、そこに鐘楼守として留まることになったからである。晃の言によれば、こうである。

こゝに伝説がある。昔、人と水と戦って、此の里の滅びようとした時、越の大徳泰澄が行力で、龍神を其の夜叉ヶ池に封込んだ。龍神の言ふには、人の溺れ、地の沈むを救ふために、自由を奪はるゝは、是非に及ばん。其のかはりに鐘を鑄て、麓に掛けて、昼夜に三度づつ撞鳴らして、我を驚かし、其の約束を思出させよ。……我が性は自由を想ふ。自在を欲する。気まゝを望む。ともすれば、誓を忘れて、狭き池の水をして北陸七道に漲らさうとする。我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものの数ともするものではない。が、約束は違へぬ、誓は破らん——但し其の約束、誓を忘れさせまい。(中略)だから一度でも忘れると、立処に、大雨、大雷、大風とともに、夜叉ヶ池から津波が起つて、村も里も水の底に葬つて、龍神は想ふまゝに天地を馳すると……恚う、此の土地で言伝へる。

……其のために、明六つ、暮六つ、丑満つ鐘を撞く。(傍線筆者)
 (1)に使われているのは、白山「千蛇ヶ池」の伝説で、夜叉ヶ池には、泰澄大師譚も、龍神が封じ込められたという話も、共に存在しない。それは、「剣ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれ」「恋し、恋しと、其ばかり思詰めて」いる夜叉ヶ池の白雪が、人間が約束を破り自由を得た日には、何はおいても白山へ飛んで行けるようにするためである。

今、玉井敬泉の『白山の伝説』(昭六・七)によれば、「千蛇ヶ池(白山麓所聞)」と題して、次のように書かれている。

泰澄開山の時、山中毒蛇多く、歡喜渴仰して諸方より登山する

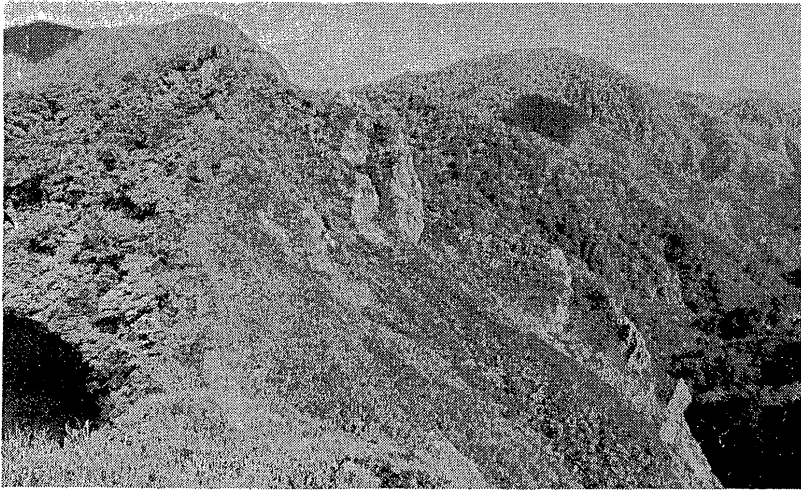
者の、害せらるゝを慮り、是を除かんと、千筋の蛇を捕へ、此池に封じ込め、万年雪を以て蓋をなし、若し万年雪の消える事あれば、くづれ落ちて雪の代りに、蓋をするやうに御宝庫の大巖石を、其上に置いたといふ。

もっともこの伝説には若干の異説もあり、鏑木勢岐『我が郷土の童話伝説』(昭四・三)によれば、千匹の蛇を封じ込めたあと、麦の種をまき、芽が出るまでは池から出てはならないといひ、そのあと雪を積らせたとなっている。しかしこの池のある雪溪は一年中消えないことでも有名だから、いずれにしろ千匹の蛇は出ることができないわけである。

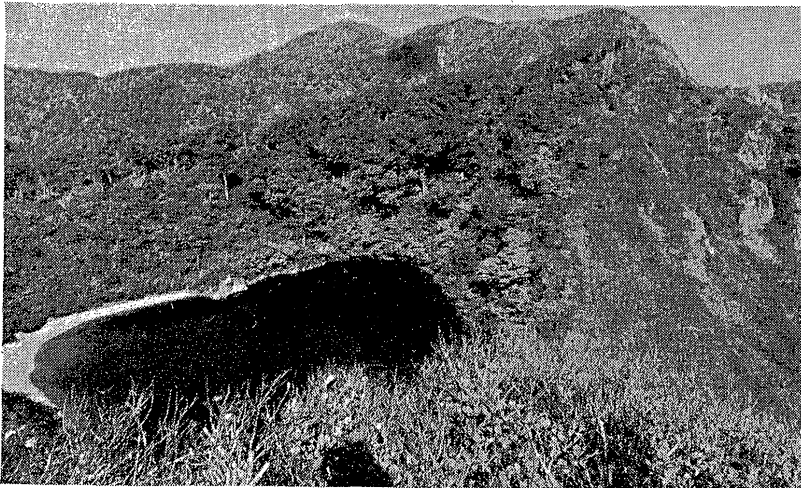
(2)について思い出されるのは、「三井の晩鐘」伝説である。この話は、最近梅原猛『湖の伝説／画家・三橋節子の愛と死』(昭五二・一)によっても紹介されているが、今、高木敏雄『日本伝説集』(大二・八)によって、その後半を引用する。前半は、「鶴の恩返し」と同じように、たまたま浜辺で蛇を助けてやった若者の所へ、ある日綺麗な女がやってくる。いつか身ごもった女は、決して産屋を覗くなどといって小屋へ入るが、男は約束を破り覗いてしまう。するとそこには大蛇がしっかり赤児を巻いていたというのである。

大蛇は忽ち姿をかくす。残してある書置を開けて見ると、自分は浜辺で救はれた蛇で、御恩返しに来たのであるが、姿を見られた上は妹背の縁は此まである。しかし、此児は兩人の間に出来たのだから、手に握らせてある玉で育て、下され。此玉さへ持たせて置けば、泣くやうな事はない。若し泣いたら、浜辺へ来て、パンパンと、三度手を打って下され。そしたら、何時でも屹度出て来る、と云ふ意味を書いてある。そして、不思議にも、赤児は

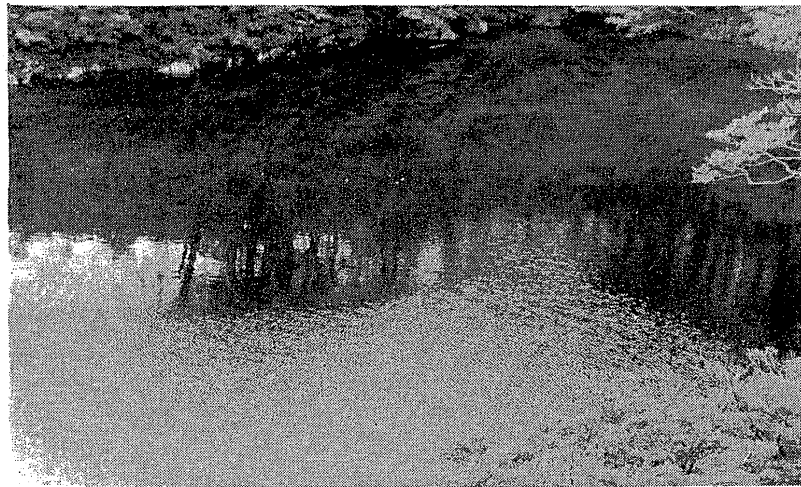
「夜叉ヶ池」考



□ 夜叉ヶ池東方岩壁／右後方に三国ヶ嶽を望む：



□ 夜叉ヶ池全景／後方に三国ヶ嶽の稜線を見る：



□ 夜叉ヶ池最深部／湖面に映える波紋と樹影：

一つの玉を手を持つてゐる。

男は書置にある通りに、児を育てゝゐると、その事が殿様に聞えて、大事の玉を取上げられる。児が泣いて、どうすることも成らぬ。そこで、男は書置のことを思出して、浜辺へ出て、手をたたくと、忽ち大蛇が現れる。元の女の姿を見せてくれ、と頼むと、今度は綺麗な女になる。玉を取られた話をする、あの玉は私の眼の玉で、今一つ残つてゐるけれど、それを取られると、自分は盲目に成る。しかし、小供の為めと思へば、盲目に成つても厭ひ

尾では、

妻が「両方目玉がないと方角もわかりませんから、毎晩子供を

はせぬ。玉は惜まらず上げますから、其代りに三井寺に釣鐘を上げて下され。其鐘の音を聞いて、昼と夜を聞きわけませう、と云つて、女が今一つの玉を呉れる。

男は釣鐘を三井寺に寄進した。その鐘は今でも三井寺に吊してあるそうだ。(傍線筆者)

『近江むかし話』(昭四三・九/滋賀県老人クラブ連合会編)の末

抱いて、三井寺の釣鐘をついてください。その音であなたがたの無事を確めて安心しますから」と申しました。

それから毎晩三井寺では晩鐘をつくようになったということである。(傍線筆者)

いずれにしても三井寺の鐘は、盲になった龍神に「昼と夜」を教えるために晩鐘をつくということである。しかし、「三度」というのは口碑伝説ではむしろ自然なパターンである。あるいは「三井寺」の「三」にも掛けたからであろうか。「夜叉ヶ池」では、龍神のために三度鐘をつく形を取っている。

冶 ところが(3)については、とくに伝説として拾えるものは存在しないが、これは全国各地にある、たとえば鉄類を池に投ずれば、たちまち風雨になるという連想から用いたものであろう。だからこのあとで、妖怪鯉七がこんなことをいっているわけである。

林 此の頃の干で、やれ雨が欲しい、それ水をくれる、と百姓どもが、姫様のお住居、夜叉ヶ池のほとりへ五月蠅きほどに集つて来こせる。それはまだ可よい。が、何の禁厭まじないか知れぬまで、鉄釘かねくぎ、鉄火かねひ箸ばし、鍔刀さむらたなや、破鍋やぶなべの尻しりまで持込もむわ。(傍線筆者)

現に手許の郷土誌「南越民俗」(昭二三・三)によると、夜叉ヶ池に触れてこんな記事が出ている。

夜叉ヶ池の大蛇は刀物を嫌ふため今でも小刀類の刃物を持つて登山するとその人は非常な暴風雨に遭ひ進退谷まるといふことです。勿論、このいい伝えをも、直接南越路を歩きながら鏡花は聞いたかも知れない。

晃が、忘れず鐘を撞くために、千蛇ヶ池へ会いに行けない白雪は、毗まじりあげ鐘楼を見る。ついに心乱れた白雪は、石段に駈上り、柱に縋まつて、何としても鐘を突き落とさんとして叫ぶ。

諸神諸仏は知らぬ事、天の御罰ごばちを蒙つても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉うれしい。五体は粉こなに砕けようと、八裂にされようと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがる、魂は、幽かまな蛍の光と成つても、剣ヶ峰へ飛ばいで置かうか。

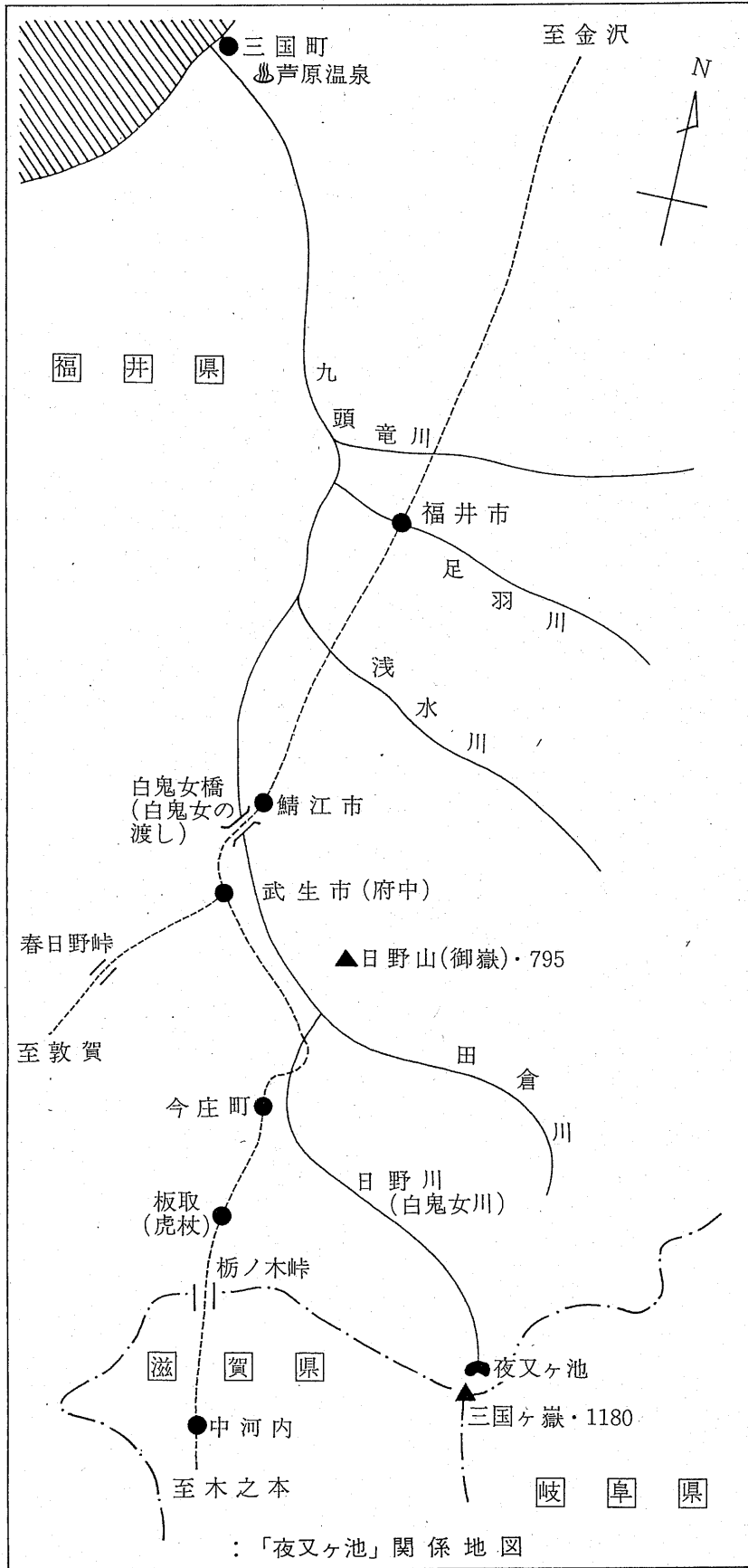
この何とも激しく怒りに燃え鐘を淵に沈めようとする話は、私にすぐ一つの話を出させる。それは、鏡花の下新町から歩いて二、三百メートルとはない、尾張町の薬種商「福久屋」(現「石黒薬局」)創業にかかる「沈鐘」伝説である。

少し長いが、「夜叉ヶ池」資料として極めて貴重であり、三浦孝次氏の『加賀藩の秘薬』(昭四二・一〇)から、その全文を引くことにする。

元禄八年の頃、七尾妙観院(私注/弘法大師によって行化されたという)の鐘楼には、どういいうわけか釣鐘が下がっていなかった。

その年景寿(私注/五代福久屋新右衛門景寿、この人は日頃信心深くたまたま七尾妙救う薬種商を営むべし)と告げられてその業を始めたといふ。またその時「万病に効あはし得難き靈薬なり」として授けられたのが今に伝わる秘薬「牛黄丹」だとされている。夜夢をみた。自らが妙観院観音堂に詣でようと、石段を登って行くくと、黒洞々の暗黒の御堂から、一道の光が差しでて、その中に観音がお姿を現わしたとみているうち、観音は静々と進み、鐘のない楼堂の中央に至った。と思うやその時突如として大地も揺がんなばかりの大音声が起り、「オーン、オーン」と喚こゑめき始めた。これに答えるかのように天空の彼方より、一条の光が赫々と照り出

「夜叉ヶ池」考



：「夜叉ヶ池」関係地図

した。それまでさだかにはみえなかった観音の姿が目もあざやかにみられて、彼は夢から醒めた。

彼はこの夢は何かわけのある観音のお告げではあるまいかと思いつめぐらし、すぐ我家を出発した。妙観院に着いて夢の次第を住職はまた憂色深く物語るのだった。

「昔この観音へ百日の願をかけた、女人があった。しかしこの女人の願いはききとどけられず、悲恋の慟哭、破約の怨恨を残して寺の門前の底なしの淵へ身を投げ入れた。いつの日のことか女

人は一念凝って大蛇となり、岩の洞窟に住むようになった。この女人は終に邪竜となった。しかして聖なる鐘の鳴り響く日毎女人は三熱の苦しみを受けるのだった。遂にこのため鐘をなきものにせんと、ある夜鐘を深淵の中へ引きずり込んでしまった。」

こんなわけで崖下の洞窟の中に一つの鐘が沈んでいるのだった。景寿思うには観音は棲に鐘のないのを悲しみ、彼の夢枕に立つたと考えた。

「その釣鐘を何とかして引き上げ元の如く致しては如何」とい

えば、「その釣鐘を引き上げると祟りがあるということだが、しかし貴下が霊夢をみたからには観音様のお告げであるに相違ないから、引き上げてみようではないか」と住職が賛同し、日を定めて信者や村人を集めて景寿が先達となり、絶えず「南無観世音菩薩」と称名しつつ掛声もろとも漸く引き上げた。

さて数日後鐘撞式を行なった。

(2) 願主の景寿が最初の一つきを撞くと、鐘の音は怪しげな鳴き声と変り物凄く、「海へ行こう、海へ行こう」と鳴り響いた。村人たちは異常な恐怖におそわれた。

やがて鐘が鳴りやまんとした一瞬、一天にわかにかき曇り、大雷雨は幾条かの怪光をともなつて起り、落雷は轟然と物凄く、そのために観音山も裂けるかに鳴動した。

ああこの時忽然として丈余の恐蛇が現われ、鐘の竜頭に巻きつくともみるや、またも鐘を釘手よりもぎ取り、蛇は鐘と共にもんどり打って、崖下の元の深淵に唸りを立てて転落して行った。不思議や大雷雨は鐘の沈むと共に晴れ上がり、七尾湾は波も静かななぎとなったのである。

村人たちはこの光景に恐れおののいた。そこで彼は再びこの鐘を引き上げること断念して、新たに竜頭の竜をやめて、虎を配し、虎の守りとして竹を添え、世にまたとない珍しい竹虎の梵鐘を新造して献納した。

爾来さしもの危怪な妙観院の鐘も無事なるを得て今日に至っている。元禄八年以来約二百五十年名鐘は無明長夜の眠りを醒まし、常に悟りの何ものであるかを物語ってきたのである。(傍線筆者)

(1)の悲恋の慟哭・破約の怨恨から身を投げ死んだ女が、寺鐘を聞

くごとに三熱の苦しみ受け、ついに鐘を深淵に引きづり込んでしまふという話は、鐘を聞くごとに、会えない恋の無意味さを知り、いかなる「天の御罰を蒙」ろうともあの鐘を落としてしまいたい、そう激しく身悶える白雪に、何とも非常によく似ている。もっとも、妙観院の淵の女はいかにも暗く、夜叉ヶ池の白雪は、さすがに女の荒神らしく遥かに自由で明るくしかも美しい、この方がいかにも鏡花らしいことは勿論である。

ところで(2)の、鐘が落ちる時の凄まじい鳴動、忽然として鐘上に恐蛇現われ鐘と共に転がって、やがて鐘も沈み、空は元のように晴れる、この二転し三転する緊迫のシーンが、また見事な程「夜叉ヶ池」の最後と重なり合っている。それとも偶然の暗合に過ぎないのか。

晃(鐘を上げ、はた、と切る。瞳と撞木落つ。)

途端にももの凄き響きあり。——地震だ。——山鳴だ。——夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。真暗な雲が出た、——と叫び呼はる程こそあれ、閃電来り、瞬く間も歇まず。

(中略)

白雪。一際激しきひかりものの中に、一たび、小屋の屋根に立頭れ、忽ち真暗に消ゆ。再び凄じき電に、鐘楼に来り、すつくと立ち、鉄杖を丁と振つて、下より空さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆらゆらと成つて傾く。

(中略)

既にして巨鐘水にあり。

(中略)

「夜叉ケ池」考

時に月の光燵々たり。

学円、高く一人鐘楼に佇み、水に臨んで、一揖し、合掌す。

月いよいよ明なり。

「夜叉ケ池」の悲劇的ラストは、百合が叔父の神官宅膳たちに「雨乞の犠牲」を無理強いされることに始まるわけだが、所謂「夜叉ケ池」伝説として知られるものは福井・岐阜・滋賀の三県に存在し、いずれも雨乞いの話である。今、福井に伝わる一つを、杉原丈夫編『越前若狭の伝説』（昭四五・二）によって紹介する。ほぼ全文である。

むかし池の上に小西弥平という豪家があった。ある大干ばつがあり、雨ごいをしたが効験がなかった。弥平は苦慮のあまり、「何人たるかを問わず、雨を降らして諸民の難儀を救う者には、わが娘を与える。」という高札を立てた。すると夜叉(やしや)丸と称する武士が弥平の宅を訪れ、「高札の通り相違ないならば、わたしが雨を降らす。」と申し出た。弥平は相違ないことを誓約した。

夜叉丸が去ってしばらくすると黒雲が立ち起り、雨が降り出して、田畑はよみがえった。夜叉丸は約束のごとく娘をもらいに来たので、弥平の第三女がみずから進んで、身を犠牲にすることを申し出、夜叉丸とともにわが家の裏の池にはいつて、蛇になった。この夜叉丸というのは、夜叉ケ池に住む大蛇の化身であったのである。

ふたりは南へ進み、湯尾峠をこえ、山また山を分けて、夜叉ケ池へ行った。しかし夜叉ケ池には夜叉丸の本妻である大蛇(美濃安八郡の領主安八大輔安次の娘)がいた。従って弥平の娘とこの本妻の間に争いが生じた。

弥平の娘は策略を考え、南柚(そま)山の関が鼻にて北陸街道に蛇(じや)体となって横たわった。このことが人々に伝わり、だれも通行する者がなくなつた。そのとき加賀藩の武士が主命で上方へ急いで、この街道へ来た。見れば大蛇が横たわっているが、急ぎの使いであるので、大蛇をまたいで駆けていった。

大蛇はたちまち美しい女になり、使者を留めて、「あなたの勇気を見こんで頼みたいことがある。主命は必ず期日までに届けるから、池まで来てほしい。池のほとりで二匹のちやうが争っているから、腹の赤い方のちやうを射とめてもらいたい。」と願った。

武士は断わりきれず、鯖波の場伝右衛門から弓矢を借り、田野の龍崎の場で十数日弓術を練磨してから、夜叉ケ池にて赤い腹のちやうを射とめた。このとき用いた弓は今も秘蔵している。

それからは山を上下するたびに、娘は的場家で休むことになつた。寝るときは一室に閉じこもり、寝姿は見てくれるなといった。しかしこわいもの見たさに、女中がそつとかいま見ると、蛇体になつて寝ていた。それ以後は娘は来なくなった。(傍線筆者)

この前半のイメージに、草双紙的趣向を加えたものが、宅膳の語なのであろう。「絶対絶命の干の時には、村第一の美女を取つて裸体に剥き……(中略)黒牛の背に、鞍置かず、荒縄に縛める。(中略)が、生命は取らぬ。然るかはり、背に裸身の美女を乗せたま、池のほとりで牛を屠つて、角ある頭と尾を添へて、これを供へる。……肉は取つて、村一同冷酒を飲んで啖へば、一天忽ち墨を流して、三日の雨が降溜ぐ。田も畠も蘇生るとあるわい。」

小林輝治

引っ立てようとする宅膳たち、止める非力の晁。間に挟まり百合は自殺する。あたかも丑満。恐ろしい氾濫が起こり、学円一人を残して悉く水に吞まれる。妖怪眷族たちのどっと笑う中で、白雪は晴ればれと叫ぶ。「此の新しい鐘ヶ淵は、御夫婦の住居にせう。皆おいで。私は剣ヶ峰へ行くよ。」その声の遠くなると共に、忽ちまたあたりは暗くなる。そこでの、最後の晁・百合を書いて、鏡花はこう結んだ。「既にして巨鐘水にあり。晁、お百合と二人、晁は龍頭に頬杖つき、お百合は下に、水に裳をひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟と顔を見合せ莞爾と笑む。」

この「鐘ヶ淵」伝説は、勿論全国的なものだが、鏡花の旅でいえば、敦賀周辺にそうしたものをいくつか見ることができる。今敦賀「金ヶ崎」に伝わるものを、先に挙げた『越前若狭の伝説』によって引いてみよう。

金ヶ崎に築（つき）島という石の島がある。ここに鐘が沈んでいるという。しかし鐘は見えない。この築島のまわりには、今も（藻）が少しもない。不思議なことだといっている。（寺社

什物語）

漁夫は常にその鐘を見ており、かつて引き上げようとしたこともあったが、恐ろしいことがあってやめた。常に竜のごときものがいて、これを守っている（笈埃随筆）

敦賀のほとりに鐘が崎という所があり、海底に鐘がある。鐘は竜神の愛するものであるから、鐘を積む船は必ずくつがえるとい、海上をかよう船は鐘を積むことを忌む。（西遊記）

勿論、この話は、橘南谿の好きな鏡花だったから、敦賀で聞かなくとも、「西遊記」で続んでいただろう。百井塘雨の「笈埃随筆」に

ついてはわからない。いずれにしろ、水に沈んで龍頭に頬杖をつき鐘を守る二人の姿には、この「金ヶ崎」の伝説がどうしても蔽いかさってくる。

以上、荒々とはあるが、最後の沈鐘に至るまで、その限々に北国の口碑伝説が生きていることを確めてきた。その仮構の跡は、まさに日本のロマネスクであることを物語っている。そのどこにもハウプトマンの匂いはなかった。「夜叉ヶ池」は、「イエーツの如く書くべき神話と伝説を」をもって書かれた最初の戯曲だったのである。しかも実に巧みで自在なその伝説の駆使は、やはり「夜叉ヶ池」を第一級の類に入れて評価すべきことを教えている。

改めて、鏡花における北国のフォークロアの意味の深さに驚くと共に、広く、「夜叉ヶ池」の再評価を促したい。

（付記）

本稿は、昭和五十三年八月、「解釈学会全国大会」で発表し、たものに拠る。また掲載の写真は、今庄町坂野進氏の御厚意により頂いたものである。その事も述べ、深く感謝したい。